

岐阜農林事務所の普及活動状況

新たな担い手の確保

■有機農業 有機の里でアグリパーク構想について連携

4月13日、JAぎふの「有機の里」において、アグリパーク重点推進モデル事業に関する打合せを実施した。JAぎふでは、農業版「働いてもらい方改革モデル」にエントリーし、秋からの本格開催に向けてプレオープンを実施している。

本取組では、誰でも気軽にできる分業型農業「Choi 農！」の確立を目指し、農業に取り組む際のハードルを下げることで、有機農業や「ぎふラル」栽培において多様な主体が活躍できる農業形態の実現を目指している。

春夏シーズンは関係者を対象として8チームが参加し、試行的な取組を開始している。品目はサニーレタス、ニンジン、ジャガイモ、カボチャで、月1回から週1回程度のコースを設定している。

農林事務所では、秋冬期の本格開始に向けて、栽培暦の作成や、生育状況調査を行うなど、事業が円滑に運営されるよう支援していく。

(地域支援第三係)



【管理作業の様子】

潜在力をフル活用した生産強化

■小麦「タマイズミR」 赤かび病対策の取組

当管内では、営農組合や大規模個人農家が水田を有効活用するための戦略作物として、準硬質小麦「タマイズミR」を約525ha栽培している。

本年の「タマイズミR」の生育は、播種作業が適期に行われたことに加え、2月以降に高温が続いたため生育は順調に進み、出穂期は4月1日～20日となった。かび毒を含まない安全な小麦を生産するためには、開花期およびその10日後の2回、薬剤散布による赤かび病防除を行うことが重要である。このため、農林事務所では3月下旬から小麦の出穂状況調査を行い、赤かび病の適期防除指導を継続してきた。今後も引き続き、赤かび病の発生状況を把握するとともに、収穫時期に関する情報提供を行い、良質で安全な小麦の生産に向けた指導を行っていく。

(地域支援第二係)



【開花をむかえた小麦】

■えだまめ 岐阜えだまめの出荷が始まる

JAぎふえだまめ部会ではハウス栽培からトンネル、露地栽培までを組み合わせて17品種を導入している。4月中旬から11月中旬までの長期間にわたり出荷を行っており、今年度の目標出荷量は700tとしている。4月21日にハウスで栽培されたえだまめの初出荷が開始された。

4月27日には、JAぎふ島集出荷場において、えだまめ栽培研修会が開催された。農林事務所からは、農薬取扱時の注意点をはじめ、今後の栽培で注意が必要な害虫の防除対策や、土づくりの重要性などについての説明を行った。引き続き農林事務所では、栽培研修会等を通じた栽培技術に関する情報提供のほか、有望品種の選定や高温対策に関する実証試験を実施し、えだまめの安定生産に向けた技術支援を行っていく。

(園芸産地支援第一係)



【えだまめ栽培研修会】

安心できる農畜水産業と農村の環境整備

■水稲 JA 営農担当者への栽培管理研修会

4月9日JAぎふアグリパークにおいて、JA各支店の営農担当者を対象とした水稲青空教室研修会が開催された。この研修会は、田植時期を前にJA営農担当者が栽培品種の特性や本田初期管理のポイントについて理解を深め、今後各地で開催される水稲青空教室において適切な説明が出来るよう、毎年実施しているものである。

当日は、約50名が参加し、農林事務所が講師を務め、高温で推移した場合の影響や栽培管理上の留意点、近年発生が増加しているスクミリンゴガイやカメムシ類への対策について解説を行った。

今後も農林事務所では、JA営農担当者と連携しながら、令和8年産米の安定生産に向けて、肥培管理指導や生育調査等の取組を進めていく。



【研修会の様子】

(地域支援第三係)

■かき「園芸特産振興会かき部会」難防除害虫フジコナカイガラムシの新しい防除技術の確立

本県の柿産地では、生産者の高齢化の進行に伴い、栽培面積が縮小傾向にある。産地縮小の一因と考えられる防除作業については、兼業農家が主体である柿産地にとって労働負担が大きく、さらに近年は高温による生育期間の延長により防除回数の増加が課題となっている。

そうした状況の中、難防除害虫の一つであるフジコナカイガラムシに対し、高い防除効果が期待される交信攪乱剤「フジコナコン」が、令和8年度から現地で導入可能となる見込みである。これにより、防除作業の省力化や出荷量の増加につながることを期待されている。

農林事務所では、県、全農、JA等の関係機関と協力し、「フジコナコン」を導入して防除回数を削減した防除体系について、防除効果の検証やコスト試算を行い、持続可能な柿産地の構築を目指している。今後も、産地の維持・向上に、調査や情報提供を継続していく。



害虫調査している様子

(園芸産地支援第二係)